

特定非営利活動法人レクタス レクタス十日市場 支援プログラム

令和6年10月8日作成 令和7年2月6日更新

レクタス十日市場 支援の特色

◇個別の通所

特に勤労青年になっていく利用者にとって、職場へ自分一人で行くことは大切なこととなります。そのためにも、**放デイ利用時から公共交通機関の利用をすすめています**。それが難しい場合は保護者とともにレクタスに通い、自立通所ができるように、保護者にも協力をしてもらっています。

自立通所ができることで、利用者も保護者も大きな自信をつけ、自己効力感「やれそうだ！」を身につけることができます。

また、保護者にとっては、自分の子育てを客観視できる好機となっています。特別にレクタスの対応が必要な利用者様には、細かく対応することもあります。ご相談ください。

◇個別の支援

多くの利用者は、特に**学習支援の時は、1対1の個別支援**をしています。利用者と支援者がある程度固定することで、継続した指導やその利用者さんの困り感を深く見つめることができます。

学習支援の多くは週1回の30分指導です。平成17年から障がい児の学習支援をやってきたレクタスでは、この短時間でも十分な支援ができることを確信しています。多くの利用者さんは、次の週にはステップが次々と進んでいくように担当スタッフは様々な支援方法を工夫しています。(ケース会議や研修会も活用しています)

さらに**毎回保護者様への報告**(直接、電話、メール、お手紙など)を基本にしていますので、保護者様も着実に支援が進んでいくことを把握でき、学習支援が短時間過ぎるという不安はなくなります。

◇中高生への重点的な学習支援

上にありますように、自由な通所時間と個人的なスケジュールを基本にしていますので、特に試験や受験を控えた中高生は、**少し遅い時間に静かに学習や自習(自学)**がゆった

りとできます。

また、**テスト対応や受験対応を相談**しながら、特別に支援する場合があります。人それぞれに細かく対応するという事は、平成17年からずっとレクタスがやってきたことです。

◇クラブ活動

レクタスの特色である「カフェ活動」（お菓子の購入やその後の落ち着いた飲食活動）の中で、自然と鉄道の話が出て盛り上がりました。そこで、次の週から鉄道クラブを作ることを利用者さんと相談しました。

こうして、**子どもたちが自主運営する「鉄道クラブ」が発足**し、それを真似て「自動車クラブ」「プラモ・クラブ」「イラストクラブ」などが次々と生まれました。利用者さんだけの自主運営ですので、もめごと自然に起きます。しかし、この活動が何より好きな子どもたちはもめごとを乗り越えていきます。**機会活用型のSSTの活動**となっています。

◇トマリの活動

レクタス十日市場では月に1回程度、日曜日を中心に、現利用者と卒業生（ボランティアスタッフ）が交流する「レクタストマリ」を開催しています。「トマリ」とはアイヌ語で「港」を意味する言葉です。

活動内容は、鉄道クラブ、自動車クラブ、プラモデルクラブ、囲碁将棋クラブ、イラストクラブなどがそれぞれの活動を楽しむ場となっており、参加者にとっては日々の疲れを癒す、憩いの時間となっています。また、心の面の支援として、学生支援士の資格をもつ指導員が、利用者の悩みに耳を傾け、一緒に解決策を考えていく活動も行っており、まさに利用者にとって安心して立ち寄り、帰ることができる「港」のような存在となっています。

◇待機者と週30分の学習

現在レクタス十日市場では多くのお子様にご利用いただいております、複数名の待機者がいる状況です。直ぐのご利用は難しいかも知れませんが、ご利用をご希望される場合は教室までお問い合わせください。

レクタス十日市場では1回30分の学習を基本としています。短いと感じられるかも知れませんが、学習に苦手意識のあるお子様にとっては、短時間集中で学習に取り組むことで

学習への充実感や自信を育むことができます。

◇あくまでも、かけがいのない「ひとり」を大切にしている

一斉の決められたプログラムというものはありません。お子様それぞれの意思を尊重し、自分のスケジュールで過ごします。

気持ちの切り換えが苦手なお子様も利用されていますが、そのようなお子様にも、本人の気持ちを尊重しながら目標を柔軟に変更し、お子様が達成感を得られるように支援を行います。

(1) 事業所における基本情報

① 事業所名 特定非営利活動法人 レクタス レクタス十日市場

②作成年月日 この「支援プログラム」は、令和6年10月8日に作成しました。

その後検討会を経て、令和7年2月6日に加除変更を行いました。

③法人（事業所）理念

NPO法人レクタスは、生来の個性や能力を伸ばす機会を必要とする子ども、成人及びその家族に対して、教育、生活上の支援に関する事業を行い、教育機会の拡充、社会参加の推進、多様な個性と能力を受け入れ尊重する社会の実現に寄与することを目的としています。

この理念のもと、レクタス十日市場は障がいのある子ども、成人に対して、それぞれの利用会員の自己実現を支援する活動を中心に行います。

④支援方針

- ・利用会員の困り感をより科学的に客観的にとらえ、その原因をさぐり、困り感の軽減のために様々な支援方法を工夫しながら、より適切な支援活動を行います。
- ・利用会員の困り感が、そのご家族の困り感につながるが多いため、保護者様やご家族の皆さんの困り感を聞き取り、利用会員の困り感の軽減と同様に支援活動を広げます。
- ・利用会員の困り感が周囲の環境により、より増幅されることも多くあるために、利用者とそのご家族の皆さんの困り感を周囲の方々に共感してもらい、利用者を取り巻く皆さんの環境を含めて、合理的配慮がある、総合的によりよいものに変えていく活動を進めます。各地域の自立支援協議会への参加やケアプラザ、学校などと連携した活

動や行事への参加などの機会を増やしていきます。

- ・上記の支援活動をよりの確なものにするためにも月に1回のスタッフ研修会や各教室で随時行うケース会議などを充実させます。利用者の困り感をより客観的に把握できるように、様々な研修会などへスタッフを派遣し、資格取得なども積極的に進めて「スタッフの支援する力」を向上させます。

⑤営業時間

レクタス十日市場の営業時間

・学校稼業日の営業時間

月曜日	14:30～18:00
火曜日	14:30～18:00
水曜日	14:30～18:00
木曜日	14:00～18:00
金曜日	13:30～17:30

・学校休業日の営業時間

月曜日	12:30～18:30
火曜日	12:30～18:30
水曜日	12:30～18:30
木曜日	12:00～18:00
金曜日	11:30～17:30
- 土曜日	10:00～16:00
日曜日	10:00～16:00

⑥送迎実施の有無 ⇒ 基本的に実施無し

- ・本法人レクタスでは、平成17年の創業時より、小中高校生の利用者が成人になり、

就業等のために公共交通機関を利用できるようになることを目指してきました。そのために、法人の自動車を使った送迎等は基本的にやっていません。利用者と保護者様が共に力を合わせて、通所できるようにすることに価値をおいています。

- ・しかし、特別な事由がある場合は、最寄りの駅やバス停までの付き添いによる送迎支援や駅、自宅までの自動車による送迎支援などを状況に合わせ、時期を区切って行ってきました。これら特別な場合はご相談にのり対応致します。

(2) 支援プログラムの概要

利用者本人は、困り感があるために学校生活や家庭生活で辛い思いをしています。利用者の辛さが、家庭では保護者やご家族の皆さんの辛さにつながっています。学校では、担任やクラスの友達の辛さにつながっています。

楽しく明るい家庭生活、学校生活、社会生活を送る中で、利用者本人の自己実現につながり、将来、利用者本人が幸せを感じながら豊かな人生を送ることができるように道を切り開いていく支援をするのが目標です。

最終的な個別の支援プログラム（個別支援計画）は、利用者さんの障がいの様相、個性や能力、性格、環境（学校、学級、家庭）などを考慮して、適切に作成されるので、同じ年齢の同じ障害の診断名であっても全く支援の内容は異なってきます。

どの利用者さんの将来にも、その人らしい幸福が待っています。幸福のあり方は、千差万別です。誰でも、幸福になる大きな権利があります。その入り口を確実に開いていくお手伝いをするのがレクタスの支援です。

「すべての子どもが同じような才能や能力、やる気を持っているわけではない。

しかし、すべての子どもがその才能や能力、やる気を極限まで伸ばす権利がある。」

ジョン・F・ケネディの言葉から

⑦-1 本人支援の内容

「レクタスの支援プログラムの概要」～困り感と幸せ感を見通す支援～

利用者の支援に至るまでに、どのようなプロセスがあるかを次に示す。

1. 保護者と児童発達支援管理責任者、教室長（管理者）との最初の面談をする。

⇒お子さんの困り感、保護者様の困り感、家庭の様子、学校の様子など保護者様からの訴えを共感し、理解する。放デイの各種ルールなども説明する。

⇒保護者記入用のアセスメント用紙の記入協力依頼する。利用者、そのご家庭など周囲の環境も含めた最初の情報収集から始まる。

2. 2回目の面談は、利用者本人に教室に来てもらい、教室環境などを直接感じてもらう。さらに、担当スタッフとも簡単な活動（余暇活動、カフェ、プレーコーナーでの活動、学習活動など）をしてもらい、本人の通所への適応状況を利用者自身もスタッフも検討する。
3. 2で利用者が教室を気に入った場合は、放デイの利用を開始する。
4. 開始にあたって、利用者の困り感を客観的に把握するために、WISCのほかに適応検査やASD検査など2～3のテストバッテリーを組んで検査を実施する。（その後、新たに困り感の把握の必要性を感じた場合は、追加のテストを適宜行っていき、より正しく客観的に困り感を分析していく）
5. 今後、教室での支援では、どのような活動をメインにするか、困り感の分析をもとにとりあえず決める。次のようなメインの活動がある。
 - ・人間関係の構築や社会性の育成をメインにする（スタッフとのカフェ活動、他の利用者とのプレイルーム（コーナー）の遊びの活動やクラブ活動など）機会活用型のSSTなど。
 - ・スタッフの指導が多い余暇活動（茶道教室、フラワー教室、書道や工作・絵画教室など）
 - ・学校生活の困り感を減少させるための学習指導をメインにした指導。
 - ・その他、利用者さんの特別な個性に沿った指導など。
6. 何曜日の何時ごろに開始するか、何分ぐらいの活動の長さにするかなど事前に決めておく。これを基本にして、随時改善してより適切な支援活動につなげていく。これらの概要を教室スタッフ全員に伝え、共通理解を図るケース会議を開く。
7. 1か月ほどで、教室のケース会議、保護者と担当スタッフ、児発管との面談を行い、初めに設定した支援内容や利用時間の配分、シフトなどの細かな検討を行う。同じ時間帯に来ている利用者（保護者）などとの相性、スタッフとの相性なども検討していく。利用者にとって無理な点、うまくいかない点、他の利用者や担当スタッフとの相性などの問題点があれば、通所する曜日や時間配分なども変えて、利用者が安心、安定するための調整を繰り返す。担当スタッフなど支援する側から、相性や問題点なども同様に扱い、環境設定の改善点を見つけ出し、支援方法等を見直す。
8. 上記の⑦の面談では、これに参加する保護者やスタッフなどは、支援する側からの視点や

大人視点が多くなりがちである。利用者側からの要望や意見を吸い上げるために、主にカフェやプレーコーナーなどで児発管と共に利用者に寄り添う「傾聴担当スタッフ」が、利用者の「お悩み相談役」として配置されている。支援者としてのスタッフとは違い、より利用者の側に立ち、新しい困り感が生まれていないかなどの利用者の現状をより正確に探り出すことを目的としている。傾聴担当スタッフからの情報も意見交換の際に参考にする。

9. 半年後の個別支援計画の更新まで、必要時には、⑦⑧の面談やケース会議を繰り返す。大きな支援計画の変更がある場合は、半年を待たずして計画の更新をする。

10. ややもすると直面する学校生活や家庭生活での問題だけに目が行ってしまい、その早い解決だけを望むことになりがちである。それは仕方のないことではあるが、利用者の困り感がどのように減少しているのか、その反面の自分の好きなことがどれだけ多く見つまっているのか、これをやっていたら人生幸せだ、というものがみつまっているのか、児発管を中心に余裕を持った長期のスパンで見えていくことも必須のことである。

11. 放デイを卒業してもレクタスへ

レクタスでは、「学び塾」と称し、平成17年から始めてきた障がい児者への支援活動も放課後等デイサービスとは別に行っている。特に、高校などを卒業し、18歳を越える中で、希望者には引き続き生活や学習などの支援を行っている。中には、小学生からずっと長期に、成人になってもレクタスに通ってくる利用者さんもおおり、放課後等デイサービスを利用している小中高校生との貴重な交流の場も設けている。

また、就労先の問題などで悩む卒業生がレクタスに相談に来ることも年々多くなっている。レクタスは、卒業生が安心できる居場所ともなっている。

レクタスでは「成人のお祝い会」も毎年行っており、特にスタッフや保護者にとっては長期にわたる成長を確認できる場となっている。目の前の問題に追いかけているスタッフや保護者にとって、立派に大人になって活躍している姿、生き生きと豊かに生活している姿を見ることで、大切な安心感を持てる場ともなっている。

⑦-2 本人支援の概要（通所してからのプログラム、5領域との関連）

令和6年の報酬改定時に厚労省からの「放課後等デイサービス ガイドライン」が更新されて、そこに5領域と支援内容の充実とが謳われている。特に、個別支援計画を作成して実際の支援にあたる際に、この5領域の考え方を取り入れることで支援が有効的になることが強調された。

ガイドラインより・・・こどもの発達過程や障害の特性等に応じた発達上のニーズの把握に当たっては、本人支援の5領域（「健康・生活」、「運動・感覚」、「認知・行動」、「言語・コミュニケーション」、「人間関係・社会性」）の視点等を踏まえたアセスメントを行うことが必要である。総合的な支援とは、本人支援の5領域の視点等を踏まえたアセスメントを行った上で、生活や遊び等の中で、5領域の視点を網羅した個々のこどもに応じたオーダーメイドの支援が行われるものである。また、特定の領域に重点を置いた支援とは、本人支援の5領域の視点等を踏まえたアセスメントを行った上で、5領域の視点を網羅した支援（総合的な支援）を行うことに加え、理学療法士等の有する専門性に基づきアセスメントを行い、5領域のうち、特定（又は複数）の領域に重点を置いた支援が計画的及び個別・集中的に行われるものであり、一対一による個別支援だけでなく、個々のニーズに応じた配慮がされた上で、小集団等で行われる支援も含まれるものである。そのため、本人支援の5領域の視点を網羅したアセスメントを・・・

以上のようなことから、5領域と支援について、必要にして十分な関係なのかどうかは別の機会に検討するとして、支援内容が利用者本人の幸せにつながっていなければならないのは、必須のことである。

どのような支援をレクタス十日市場教室で行っていくか、一般論を述べることは、基本的に支援方法が個別支援となるため、難しいことになる。

そこで、利用者Aさんの例を次に述べて、ここから、レクタスの本人支援の概要がどのようなものであるかを類推していただきたい。

Aさんのレクタスでの支援の状況

1. 教室に通ってくるまで

- ・学校から帰宅して、レクタス用のバックに必要物（宿題、筆記用具など）を入れ、午後4時に自宅を出発して、自力で通所してくる。

【①健康・生活 ○生活習慣や生活リズムの形成○基本的な生活スキルの獲得

○生活におけるマネジメントスキルの育成】

2. 教室についたら

- ・入り口で手指の消毒をして、下足箱にきちんと靴をしまう。

【①健康・生活 ○健康状態の維持・改善○基本的な生活スキルの獲得】

- ・出席調べ（一覧表に氏名と来室時刻を書き込む）

【⑤人間関係・社会性 ○自己の理解と行動の調整】

3. メインの学習活動の前に、一息つくカフェ活動（麦茶を飲む。お菓子を50円分購入して食べる）をする。カフェスタッフの方へ挨拶とお願い、購買活動。

15分間

【③認知・行動 ○対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得

④言語・コミュニケーション ○コミュニケーションの基礎的能力の向上

○言語の受容と表出 ⑤人間関係・社会性 ○情緒の安定】

4. 学習活動 30分間 基本は1対1の個人指導である。担当スタッフも固定。

◇学校で算数の2桁かける2桁の掛け算計算で間違えることが多く、テストの点が低いことで友達から言われることで心が傷つき暴言をはくことになる。宿題の答え合わせでも「ちがいまーす」と言われると机に突っ伏して何もしなくなるなどの不適応行動につながっている。これが困り感となっている。

- ・レクタスでは、苦手な2桁かける2桁の掛け算の問題に取り組む。計算間違いの原因は、ノートの線に合わせて書くこと、桁を合わせて書くことがうまくできずに違う桁の足し算をしてしまうなどのミスが起きている。その解決のために、縦の線も入れた（升目のような）計算ノートに書くことをする。

【③認知・行動 ○行動障害への予防及び対応等】

- ・焦って掛け算をおこない、 $4 \times 7 = 24$ のようなミスを犯すことがある。掛け算の筆算の隣に、 $4 \times 7 = 28$ を書いておく。計算が終わったら、それらを自分で見直してチェックを行う。時間がかかるが絶対に間違えない方法ということで納得してもらってやっていき、きちんとやれば間違いは起こらないという自信を繰り返しの中でもっていく。

【③認知・行動 ○対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得】

- ・また、練習問題などをやった後で、指導者は「これは間違い」という言葉は絶対に発しない。さらに、答え合わせで「×」をつけない。プライドを傷つけることは一切やらないようにする。ほめる、やる気を起こさせる言葉かけをなるべく多くして指導する。

【③認知・行動 ○行動障害への予防及び対応等 ⑤人間関係・社会性 ○情緒の安定 ○自己の理解と行動の調整】

5. 学習後のプレーコーナーで人生ゲームを他の利用者と楽しむ 25分間

- ・いつも相手になってくれるBさんとCさん（Aさんがかっとなることが多いのを知っていて大人しく対応してくれる友だち）と人生ゲームを始める。

【④言語・コミュニケーション ○コミュニケーションの基礎的能力の向上

○言語の受容と表出 ○状況に応じたコミュニケーション

⑤人間関係・社会性 ○情緒の安定 ○他者との関わり(人間関係)の形成

○遊びを通じた社会性の発達】

- ・担当スタッフは、20分後にゲームを終わりにして、そのあと5分間で片付けをして、楽しく終わることを告げる（回数を重ねていく中で、この関りは減らしていく）。また、傾聴スタッフがいる場合は、利用者が安心して話ができる場も設定する。

【③認知・行動 ○対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得

⑤人間関係・社会性 ○自己の理解と行動の調整】

- ・ゲームを楽しんで、片付け終えて、帰宅のための準備をする。トイレに行ってから、教室を離れる時間を記入して、挨拶をして帰る。

【②運動・感覚 ○身体の移動能力の向上 ○保有する感覚の活用

⑤人間関係・社会性 ○自己の理解と行動の調整】

以上がAさんのレクタスの利用の実態とその活動で狙う目当てで5領域と関連するものをあげた。

カフェ活動や次の学習活動やプレーコーナーでの活動も含めて、すべてこの時間は「利用者からの困り感、悩みごと、相談」を受ける「**傾聴の場**」となっている。利用者により、様々な機会にスタッフに自分の気持ちをさらけ出すことがある。いつでもスタッフは「傾聴」の心構えをしながら、利用者がふと漏らす「本音」を聞き逃さないようにしている。また、本音が語れるような雰囲気作りもしている。

一見すると塾のように勉強ばかりをしているように見える、にぎやかにほかの利用者と遊んでいるように見える、静かにテーブルでお菓子を食べ、お茶を飲んでいるだけのように見える・・・それらは、利用者の困り感を把握する大切な機会となっている。「傾聴担当専門のスタッフ」がいる場合もあるが、基本的にすべてのスタッフは、傾聴担当者でもある。

Aさんの以外のレクタス利用者の支援の状況

Aさん以外の利用者も同様の支援方法を基本的には行っているが、困り感の違いにより、微妙に活動の違いがあり、めあての違いとともに支援方法の違いが生まれる。

「満点の支援」とは、「利用者本位で利用者が満足する支援」「利用者だけでなく、そのご家族全体が満足する支援」「障がい児者への支援が、特に高齢者やひとり親家庭などの弱者を含む地域全体の住みやすさにつながる、広がる支援」である。これらを理想として、現状を見直しながら改善を積み重ねる努力を地域の住民すべてと目指したい。さらに、それらの原動力としての福祉行政からの支援や努力も期待したい。

支援の目指す方向性が正しく、支援の方法が利用者の困り感、個性などから見て適切ならば、それが支援の王道と思われる。5領域にとらわれ過ぎて、要素主義のようになることは避けなければならないだろう。利用者とそのご家族の幸福というものに確実に焦点を当てて支援が行われれば、それは結果として障がい児者支援の王道となると私たちスタッフは考えている。

※ 以下の文章には、レクタス十日市場教室だけではなく、NPO法人レクタスとしてやってきた活動も含まれている。

⑧ 家族支援

1. 以前から行ってきた家族支援

平成17年のレクタスの事業開始以来、障がい児者のための学習支援を主にして、余暇支援、家族支援など、レクタスではずっと続けてきた活動がある。特に、障がい児者本人同様に、ご家族や保護者様の支援の方に力を入れる必要を感じてきた。

2. 講演会（ミニ講演会）

長年続けてきた「カニングハム久子先生 講演会」は、市内すべての小中高の個別支援級、特別支援学校や養護学校へチラシを配布して行ってきた経緯がある。これは、(6)の「地域支援・地域連携」にも関わる行事でもあったが、講演のテーマによっては、多くの保護者が目に涙をすることもあり、保護者が家庭に帰って、また元気に我が子と明るく生活していくエネルギーを蓄える貴重な場となっていることを実感してきた。

テーマによっては、参加人数を絞り、より話しやすい環境でおこなう「ミニ講演会」も行ってきた。

3. 保護者見学会と保護者学習会

利用者さんの進学先、就労先を見直す「保護者学習会」「保護者見学会」も行ってきた。令和6年度は、就労先ということで金沢区幸浦にある「クルミっ」子の工場見学を予定している。

また、進学先として高校、その他の学校などの特色や状況、卒業後の進路などをレクタス・スタッフの元横浜市立中学校校長に毎年、進学先の状況など進学先の説明会を「保護者学習会」として行ってきた。

霧が丘本部（教室）の近隣の県立霧が丘高等学校のインクルーシブ担当の先生においでいただき、インクルーシブに進学している元利用者の状況など情報交換をする機会も設けてきた。進学先の相談に来る保護者への情報提供にも利用してきた。

4. 保護者カフェ

利用者の保護者が、先輩保護者に直接話を聞いたり、同じような悩みをもつ保護者が情報交換をする「保護者カフェ」も教室毎に開いてきた。この中には「きょうだい関係をどうしていくか」「成人に向けてのきょうだい支援」などの家族関係や経済的な自立、遺産相続の問題など多岐にわたるテーマで行われてきた。

さらに複数の教室保護者が参加できるテーマを設定しての保護者カフェもミニ講演会のように会場を設定して行ってきた。

5. 教育相談

レクタスの組織全体の中で、保護者が子育てや家庭のことで悩み事がある場合、基本的には、各教室長（管理者）や児発管と相談に入るが、問題が深かったり、担当者がより適切な相談相手が必要だと認めた場合は、本部付の「教育アドバイザー（無料）」や「レクタス・カウンセラー（有料）」が相談の相手をするになっている。その結果は、個別支援計画にも反映される。

保護者は、いろいろな相談相手と話すことができ、より大きな安心を覚えている。

保護者が安心して子育てに専念できる状況を作り出すことで、利用者が目に見えて安定してくるということも多く見られるので、急がば回れということも考えていきたい。

⑨ 移行支援

入学や進学、就職時等のライフステージの移行時における「移行支援」は、利用者を取り巻く環境が大きく変化する中で、重要なものとなる。

1. 入学や進学時の移行支援

学校に通っている利用者は、必然的に年度ごとのクラス替えや節目の卒業、入学という大きな環境の変化を受けざるを得ない。予めこれらは、予測ができるので、個別に対応を強化してきた。

・「小さなライフステージの移行から」 入学体験や宿泊体験の導入

特に大きな不安が利用者にある小学校入学式では、4月からの放デイ利用が確定しそうな段階で、模擬入学式を行う場合もある。また、初めての宿泊体験も大きな不安を伴う。そのために、これも教室を使って実際に友達と模擬体験をする対応をやってきた。

これらは、いずれも通常以上の不安傾向がみられる場合に、事前に保護者や学校の先生などと相談をしながら行ってきた。学校行事を「小さなライフステージの移行」と捉えるとカフェコーナーでのお菓子を購入することも、もともとは修学旅行で「おみやげ購入」に不安がある利用者のために始めた経緯がある。

・進学や就職時の移行支援

進学のためには「受験」という試練が待ち構えていることが多い。受験の前にも中学生などには定期テストもある。レクタスの利用者が不安に思ったり、失敗したりするのは、受験や定期テストのための勉強をどのように計画的に進めていくかの点である。中学校の1年生の担任の先生が「普段からまじめに授業を受けていれば、定期テストなんか、特に勉強はしないでも大丈夫」とか、同級生から「私は、試験勉強なんて何もやっていないよ。(本当は塾に行っていて、とっくに勉強はすませている)」などの言葉を鵜呑みにして、ほんとうに何もテスト勉強をせずについて、殆ど0点近くのテスト成績が返ってきて、そこで初めて慌てるようなことが多くある。

受験も就職のための準備も、同様に計画立ててやっていく部分を支援する必要が多くある。面接練習も何回もやって試験官もいろいろなスタッフにやってもらい度胸をつけることもやっている。

日常の生活の中身が変わる、生活のリズムが変わるといふときの不安をどのように取り除くかが移行支援の基礎であり、大事なポイントとなる。

またレクタスは、平成17年より障害児への支援を続けてきているので、スタッフも保護者も移行支援の問題を多く経験している。それらは保護者カフェや教育相談などでも扱われてきており、家族の間の安心感につながっている。

⑩地域支援・地域連携

地域とつながりを作る取組として、十日市場はケアプラザと共催事業や障がい児者の支援ネットワークのお祭りへの参加など連携活動を行ってきた。

- ・地域活動ホームとケアプラザの連携による「ホットタイム」のコーナーやみどり障がい児者支援ネットワークの障がい者週間の催しごとに利用者が制作した作品の掲示や鉄道クラブ、自動車クラブの模型展示など、利用者本人が地域の活動と一緒に参加する機会を確保してきた。

放課後等デイサービスの中だけの対人関係だけでなく、様々な障がいのある人々との交流、地域の多くの方々との交流の貴重な機会となった。これは、自分やレクタスの友達をまた別の視点から見ることができる大切な機会となった。

- ・霧が丘ケアプラザとは、夏の「工作教室」、冬の「書き初め教室」では、レクタス・スタッフが講師となり、10年以上連携を深めてきた。ケアプラザの募集では、レクタス利用会員と地域の子どもたちが一緒に活動ができるように、チラシ配りなども工夫していただいていた。

また、工作教室では地域のお年寄りが、書き初め教室では、霧が丘高校の書道部の生徒たちがお手伝いのボランティアに入ってくださり、その方々との交流も貴重な機会となった。

- ・学校によっては、利用者の担任の先生がレクタスでの活動の様子を見学に来てくださったり、担当スタッフとの情報交換の機会を設けてくださるなど、連携が進んでいる地域も多くなってきた。

さらに特に北部療育センターなど医療機関等から学習面での困り感のある障がい児と保護者へレクタスを紹介される機会や区役所の福祉担当者や児童相談所の担当者からレクタスを紹介されたり、その後の情報交換なども行うなど、公的機関からの連携が増えてきた。これらは、地域の中で着実に障がい者支援を続け、実績が認められている証拠でもある。さらに様々な機関や組織との連携を広げていきたい。

⑪職員の質の向上に資する取組

- ・レクタスのスタッフ研修会は、毎月開催され、殆どのスタッフが参加をしている。特に今年度は、全体会だけでなく教室毎のケース会議、安全や虐待、身体拘束などのより具体的な研修も組み込み（これまでは各月に「虐待・身体拘束研修週間」などを設定して研修を進めてきた）、より毎日の実際の指導に役立つ研修を増やしている。

全体会では、実践から生まれた工夫や指導のアイデアなども発表され、スタッフ同士がお互いに刺激を受けて、お互いに向上していこうとする雰囲気生まれてきている。

・現在横浜市内にレクタスの教室（事業所）は6つあるが、スタッフによる自教室以外の教室訪問・交流を行い、広い視点から自らの支援活動を、自教室の支援活動を見直す機会としている。他教室の訪問は、よい刺激となっており、見学される側も自らを見直す機会となっている。

・強度行動障害支援者研修など公的な機関による研修のほか私的な団体による有料の外部研修会などへのスタッフの参加を促している。結果として資格を保持できるが、それ以上に利用者の困り感の傾聴ができるようになり、支援方法の視点を広げることや支援に自信をもって臨めることなどのよい効果が生まれ、多様な支援ができるようになっている。

スタッフが資格などを身につけている状況（レクタス全体のスタッフ52名 令和6年12月現在）

- ・公認心理師2名 ・メンタルケア心理士2名 ・認定心理士2名 ・学校心理士1名 ・教育心理カウンセラー1名
- ・学生支援士（傾聴担当）1名 ・不登校心理相談士1名 ・ひきこもり相談支援士1名 ・不登校支援専門員1名
- ・相談支援専門員1名 ・博士号保持者2名 ・修士号保持者1名 ・大学（元）教員3名 ・高校講師1名
- ・元小中校長2名 ・元小中教員8名 ・小中高教員免許保持者22名 ・元保育士幼教諭3名 ・学芸員資格2名
- ・保育士幼免許保持者19名 ・図書司書3名 ・TOEIC700点以上4名（内900点以上2名）・英検2級以上8名
- ・漢字検定1名・華道、茶道資格3名・アロマセラピスト2名・ピアノ講師2名・メンタルケア学会正会員1名
- ・社会福祉士2名 ・チャイルドアートディレクター1名 ・福祉環境コーディネーター1名 ・ガイドヘルパー3名
- ・Mos Excel Speciarist 1名 ・ヘルパー3名 ・キャリアコンサルタント1名 ・簿記検定4名 ・色彩検定1級1名
- ・キャリアディベロップメントアドバイザー1名 ・ファイナンシャルプランニング技能士1名 ・技術士（建設部門）1名
- ・計算実務能力検定1名・秘書英語検定1名・硬筆書写検定1名・日本語文章処理技能検定1名・ビジネス文章技能検定1名・強度行動障害障害者支援者研修受講済み3名・秘書検定資格3名 ・生涯学習インストラクター1名・
- ・タッピングタッチ協会会員1名 ・フラワーアレンジメント講師2名 ・手話奉仕員2名 ・POPクリエイター1名
- ・書道師範2名・サービス接遇検定2名・気象予報士1名 ・ITパスポート2名・着物着付け技能士1名
- ・リンパマッサージ士1名 その他

⑫主な行事や活動など

・年間の行事では、「夏休み教室」として、工作や手芸、料理教室などを行い、楽しい活動となっている。手作りの作品を夏休み後に学校に持っていく利用者もいる。

・季節を感じて豊かに生活してもらうように、それぞれの教室では利用会員がお雛様や七夕、ハロウィン、クリスマス、お正月などの飾り物を作成したり、特別なカフェ活動でお菓子を楽しむなど様々に工夫をしている。

・さらに、土曜日や日曜日利用して、「わくわくホリデー」「レクタス・トマリ」などの名前で工作やフラワー教室など楽しい活動をそれぞれ教室毎に工夫をして行っている。

・毎年2月には、「レクタス成人のお祝い」を教室毎に行っている。懐かしい友達やスタッフに会える機会だけでなく、現利用会員にとっては、先輩に会える貴重な機会（あんな大人になりたい）にもなっている。また、前にも述べたようにスタッフにとっては成長を大きなスパンでとらえることで「あのやんちゃだった子どもがこんなに立派になるんだ。目の前のことに焦らなくてもいいんだ。」と支援活動にゆとりと見通しをもつことができる貴重な機会となっている。

・「レクタス文芸誌」（部外秘）が隔月に出されている。利用者がイラストや絵を描いたもの、工作の作品（写真で参加）や紀行文、小説など多くの表現活動の発表の場となっている。毎回20点以上の参加があり、出版を楽しみにしている利用会員や保護者も多い。出版後は、毎回「鑑賞会」が開かれて、一つのイラストでもその利用者の心の背景や成長などを担当者が説明をし、情報交換をする機会となっている。その利用者を多面的に見ることや意外な特技、新しい趣味など利用者の豊かな心の世界をスタッフが知っていく場ともなっている。

以上